

山村の棚田の風景を思い、 ベートーヴェンの「田園」を演奏した子供のこと

——指導者の手紙から——

公益財団法人育てる会 会長 青木 孝安

最近のこと、育てる会指導者から手紙をもらった。

その手紙は十年前に面倒を見た子供たちの、同窓の集いに参加した時の様子を書き綴ったものである。その指導者は感動を込めて、次のような、集いでの一こまを知らせてくれた。

記憶にありますでしょうか、小学三年、小学四年と二年間、山村留学をした子で、一番年下でしたから、みんなの妹のような存在で、よく可愛がられていました。今、音楽大学に通っていて、フルートを演奏している彼女が、みんなの前でこんなことを言ったのです。

「八坂で過ごしたときに、毎日見ていた風景が私の原風景です。例えば、ベートーヴェンの田園を演奏する時には、センターの下に広がる棚田を思い浮かべます」
彼女はこのような言い、実際にみんなのまえで演奏してくれたのです。

私は、音楽、美術などの、芸術はもちろんのこと、文学、自然科学など、あらゆる分野、領域の学問、教科は、実体験があればあるほど、理解が深まるし、表現も豊かになると信じています。まさに、彼女は、「山村留学の体験が生涯学習の礎になる」ということを体現してくれたのです。

育てる会の教育というのは、効果、実績を点数や成績表には表せませんが、このように、教育、学習の土台、根幹を築き上げる大事な役割を担っているし、実際にそれを果たしていると思います。彼女の、この言葉を聞いて、とても嬉しく、誇らしい気持ちになりました。

私はこの手紙を読んで、同じように山村留学（長期の自然体験活動）を終えた子供たちや保護者が語ってくれた言葉を思い出した。それを、感想文から、あるいは交わした会話から選んで紹介しよう。

保護者の感想から

「手伝いをよくするようになった」、「兄弟関係が良くなった」、「兄弟への思いやりを感じる」、「マナーが良くなった」、「親の口出しを嫌がるようになった」、「ものを大切に

するようになった」、「自然への理解が深まった」、「自己判断をするようになった」、「仕事など、よく動くようになった」、「無口になった」。

子供たちの感想から

「私たちは、私たちが、挨拶がよくできるようになったとか、よく動くようになったとか、思いやりの心が持てるようになったとか言うが、そういうことは、都会に帰れば、元に戻ってしまうものもある。山村留学をした意味は、今では、まだよく分からないが、もっと、奥にあるような気がする」

「帰ってきて、どこが変わったかなんて、よくわかりません。何かを得て、それが、何かに役立つというのではなく、自分の中にたまった経験、つもった経験が、その場、その場に応じて出てくるものだと思います」

「山村留学の一年で、変わったものがあつたというのは、「ウソ」だと思います。私にとって、「一年間変わったことをやったな」ではあつても、「自分自身変わったな」ではありませんでした。あの一年間は後になって聞くものがいっぱいあつた一年間と思います。」

保護者は目の前の子供の姿を見て教育効果を語っている。一方、子供たちは、親の言う、目に見えるようなものではなく、自然体験の効果は、もっと奥にあるものではない

か、と言っている。私は子供のこの言葉に引き付けられた。私は、子供たちが言う、「その奥にあるもの」を知りたいと思い続けてきた。

そして、私は、大学生となった子供が、子供の頃に見た美しい棚田の風景を思いながら、ベートーヴェンの田園を演奏したという話を聞いて、「ここにあつたんだ」と思った。

なんと、美しい言葉であろうか。なんと心温まる話であろうか。
体験した子供たちが言う「奥にあるもの」とはこれなんだ、と知った。

自然の中で、子供たちはそれぞれの個性、特性に応じた自由な感性を働かせて生活する。

自然の情報を、いつ、どこで、どのように受け取るかは、子供の自由なのである。
そこで得られた宝は、その子供の奥深くに潜み、人生の必要な時期に花開くのだと知ったのである。